学校法人ノースアジア大学 広報

さくら

SAKURA 2010.2 February No. 222

CONTENTS

01~10/ 特集　卒業
11/ 留学に向けて・留学を終えて
12/ アンサンブルコンテスト県大会入賞
観光シンポジウム
加賀さん表彰選手に選出
インフォメーション

新しい門出を祝して

学校法人ノースアジア大学　理事長
ノーアスアジア大学・秋田栄養短期大学　学長
小泉　健

卒業の日を迎えた皆さん、また保護者の皆様に、学園を代表して心からお祝いを申し上げます。

江戸時代の京都に伊藤仁斎という儒学者がいました。教育が義務でなかった時代に、彼の元には数千人の弟子が集まったそうです。仁斎は、人間にとって最も大切なのは、学問と教育によって善の可能性を高めることとして、学問と教育を愛でもって実践することの大切さを説きました。私は、学園の教職員に彼のことをよく話します。本学園では、学問の喜びと、人生をどう生きていくべきかを、学生と心を通い合わせ、志と愛情を持って指導することを目標に改革を進めてまいりました。今年度は更なる教育の質の向上に向けて「教育諮問会議」を設置し、現代の教育問題に関心が高い有識者を委員に迎え、忌憚のないご意見をいただきました。来年度はいただいたご意見を元に、更なる教育環境の充実を進めてまいります。また、秋田看護福祉大学の福祉行政コースの設置や、のびのび幼稚園・保育園の菜食中心の給食への変更など、社会の要請と子供たちの将来を考えた施策を実施しました。

さて、社会では、リーマンショック以降先の見えない経済状況が続いております。学園を卒業し、社会人となる皆さんには、就職活動で体験した以上の厳しい現実が待ち構えています。これからの人生の大部分は、仕事に費やす時間となります。将来とは不確実なものであり、その中で常に選択を迫られることになります。選択が間違いであったと思うこともあるかもしれません。しかし、皆さんには失敗を恐れてなにもしないのではなく、しっかりと目標を立てて実行できる社会人になっていただきたいと思います。大切なことは何かを常に考えながら仕事をすることが必要なのです。そのために、この学園で培ってきた「自分の頭で考える」人間であり続けていただきたい。

本学園での学生生活の中で、自分が打ち込めるものを見つけた皆さんは、今後自分の進むべき道をしっかりと見つけ、目標達成へとさらなる努力を続けて行くことと思います。皆さんのご活躍とご健勝をお祈りいたします。

特集卒業

経済学部経済学科 ― 公共政策ゼミナール「公共政策の財政構造分析」

全学年のゼミ生が集まって討論を行い、学年に関係なく皆仲が良いという金子ゼミ。

毎回議論が白熱し、時間内で終わらないこともあるそうです。その中で、リーダーを務めた吉田龍司さんは、市町村合併について討論した時が一番楽しかったと振り返りました。

思い出深かったのは、学園祭で出店した時に、金子先生やゼミの皆と一緒になって、多くのお客さんに喜んで頂くアイディアを出し合ったこと。ゼミで討論する時とは違う、先生のユニークな一面を見ることができたとのことです。

金子先生が「ゼミ生の中でも特に優秀だった」と太鼓判を押す吉田さん。金子先生の「ゼミでも説明したと思うけれど…」と前置きして、手にした専門書を用いての質問にも、スラスラと答えました。

また、狭き門を突破して、地元の町役場の採用試験にも合格。１年生から受けた授業やゼミで討論した様々なこと、先生の教えなどを自分のものとして消化できたことが合格につながったと言います。「将来は、地元に若い人が戻ってきて、活気のある町にすることが目標です」と卒業後の抱負を語りました。金子先生も「リーダーとしてゼミをまとめたことや皆と議論したことが、今後役に立つと思います。ゼミでの経験を生かして、目標達成に向けて頑張ってほしい」と話してくださいました。

◆ゼミナールで学んだこと

経済学科４年　吉　田　龍　司

ノースアジア大学に入学し、あっという間に４年の歳月が経ちました。大学生活の中でも、ゼミナールで学んだことは、わたしにとって良い財産となり、今後の社会生活でも大きな力となることと思います。そこで、ゼミナールで学んだことで良かった点を三点挙げたいと思います。

まず、学ぶことの面白さを気付かせてもらった点です。金子先生から様々な興味深い問題や事象を教えていただいたことで、関心を持って前向きな姿勢で学ぶことが出来ました。

次に、様々な視点から多面的に物事を考える力を養うことができた点です。世の中の様々な問題や原因、その改善策を考える上で、非常に役立つことだと思います。

さらに、多くの仲間が出来たことです。金子ゼミナールでは、全学年のゼミ生が集まって議論や研究を行うことから、良い仲間意識が生まれ、卒業後もアドバイスをして下さる先輩方も大勢いらっしゃり、非常に参考になりました。

このゼミナールで得たことを社会に出てからも活用し、努力していきたいと思います。

◆社会に羽ばたく皆さんへ

講師　金　子　　光

めでたく卒業を迎えられた皆さんに、心よりお祝いを申し上げます。

皆さんにおかれましては、本学で身につけた学問と人との出会いを大切にして、これからの新しい人生を夢と志と勇気をもって、堂々と歩んでいかれることを願っております。

卒業という人生における一つの大きな節目に際して、皆さんに考えて頂きたいことが三つあります。

第一に、皆さんの在学中の４年間で、社会は大きく変化しましたが、政治・経済・文化などの分野で、どのような要因でどのような変化が起こったかを振り返って頂きたいと思います。その上で、変化する時代のなかで次の段階をどう展望するかがこれからのもっと大きな課題になります。

第二に、本学での学生生活が皆さんにどのような変化をもたらしたかをじっくり吟味してください。学問に触れ新しい可能性に挑戦した結果として皆さんの中に何が起こったのか、どのような変化の痕跡が残ったのかを総括して頂きたいと思います。

第三に、在学中に起こった社会の変化と皆さん自身の変化や成長はどのような関連にあったか思索をめぐらせてください。これから皆さんは、社会との関わりが一層深くなり、そのなかで自らを成長させ、様々な場で力を発揮することが期待されています。こうした整理や総括は自らの経験を大切にし、それを生かして社会のなかで次の経験を積み重ねていくことにつながっていきます。

以上の三つの課題は、卒業に際して考えるとともに、これから社会人としての自覚のもとに常に念頭に置いて頂きたいことでもあります。

皆さんにはグローバル化が進展する中で、世界が直面する課題に、本学で取り組んだ知的生産とそこで培った体験を誇りに胸を張って立ち向かって頂き、さらに大きく成長されることを願っております。

前途に明るい未来が開けていることを信じて、健闘されることをお祈り申し上げます。

特集卒業

経済学部マネジメント学科 ― 財務会計論ゼミナール「会計の知識が必須の時代」

「聞く技術がビジネス力を高める」をテーマに、質問の仕方や受け答えの仕方など、コミュニケーション能力を高めるビジネスゲームを通して、「聞く技術」を高めてきた海老川ゼミ。

ゼミ長を務めた内藤雅博さんは、「初めは、自分が心の中で思っていることが、思ったように文章にならなかったり、相手に上手く伝わらなかったりと苦労しました。慣れてくると、相手の聞き方などの様子を見ながら話すスピードを考えるなど、余裕を持って話すことができるようになりました」と話しました。

個性豊かなメンバーが多く、最初はまとまりがなかったゼミ生たちも、３年時の大学祭での出店で協力し合うようになり、きずなが深まったといいます。「ただ出店するだけではなく、普段ゼミナールで学んでいることを生かし、実際に利益を上げることを目標に、売る品物を考えました。大学祭での出店ですので、お客様へサービスもしましたが、原価計算をしてコストパフォーマンスを考え、プレゼンテーションを行った結果、目標を達成できました」

大学祭の売り上げで、近場ながらゼミ旅行にも出掛け、先生も学生も真剣になって意見をぶつけあった合った結果、広く浅くの交流が、信頼関係を伴った深いものになりました。

ゼミナール協議会の会長も務めた内藤さんは、「卒業試験はゼミの皆で模擬解答を作って勉強しました。就職活動も、先生や職員の方が気にかけて声を掛けてくださいました。ゼミナール協議会では、仲間に助けてもらいながら、皆で団結してやってきました。友人や先輩、後輩、先生方など、色々な人の支えがあり、ここまで来ることができたと思っています」と４年間の大学生活ににについて振り返りました。

海老川先生はゼミ生について、「学生と近い目線で接し、本気でぶつかって行き、学生の心の中に入って行く指導を心掛けてきました。最初は子どもだった学生たちも、４年生になって社会人としての自覚が出てきました」と話しました。また、卒業して行く学生たちに、「人生は修行中。自分以外は皆先生と思い、常に謙虚であれ、と願っています」とエールを送りました。

◆支えてくれた全ての人に感謝

マネジメント学科４年　内　藤　雅　博

今大学生活を振り返ってみると、良き友人や先生方、仲間たちに恵まれとても充実していました。こうしてみると長かったはずの４年間が短く感じられます。

特にわたしは、入学時から経済学部ゼミナール協議会に所属し、３年生の時には会長として行事の企画や運営をしてきました。会長という責任のある役職についたことで大変だったことや辛かったことが沢山ありましたが、仲間の支えで乗り越えることができ、とても貴重な経験をすることができました。

これらの経験がわたしの強みとなり、就職活動に大いに役立ちました。

しかし、初めは順調に思えた就職活動も、なかなか決まらずに落ち込むこともありました。そんな時、先生方や友人、仲間たちに励まされ、再び前進することができました。多くの人に支えられ、頂くことができた「内定」にはその言葉以上に大きな価値があると思います。

これから社会人として新たなスタートを切りますが、ノースアジア大学で学んだことを最大限に生かし、社会の一員として頑張りたいと思います。

◆頑張れ若者！ 輝け！ NAU のミッションを伝える門弟たちへ

教授　海老川　寿美夫

私の愛弟子であるゼミ生９名の４年間の人生修行の旅を顧みると、社会の仕組みも理解できず、人生の何たるかもわからずに、ただ、ただ闇雲に日々を送っていた時の顔と、時は移り４年次になり、就職活動を経て社会の一面を垣間見てきた顔には（当然ながら）、彼ら、彼女らの姿と心に隔世の感を覚えるのです。

ここにきて師は、匠長にしか味わうことのできない美酒（教師冥利に尽きる意）に酔いしれることが出来るのです。何時の世も「自分よりも偉大なるもの」に対峙して、あるいは「己の前途を遮るもの」に対して若者特有の反抗心を募らせるものであり、不正や悪の存在に到っては瞋恚の焔を燃やすものであり、それは人生の修行中である若者の勲章でもありました。このような気概と無垢の心田を、どうぞ忘れないでください。

やがて、ある年齢になれば人の上に立つ日がくることでしょう。その時「あの人に相談に乗ってもらおう」、「あの人に力を貸してもらおう」というように、敬愛され、信頼される人になってください。では、師範代からの「贈る言葉」でクロージングアドレスといたします。

1．最初の１年間だけは歯を食いしばって諦めるな。
2．挨拶がきちんと出来る人間になりなさい。呼ばれたら「はい」と返事をしなさい。
3．周囲への感謝の気持ちを忘れるな。
4．もし大学生活を送った土地を離れるときは、４年間お世話になった街や人に頭を下げて行きなさい。

卒業生の皆様の武運と長久を祈っております。

法学部法律学科 ― 刑法ゼミナール「刑法における重要論点の検討」

秋山ゼミナールでは、先生自身の経験から、「人前で話せるようになることは大切」と考え、ゼミナールでの発表では、発表者の他にも学生が順番に司会者を務めました。

また、テーマを決めて２つの考えのグループに分かれて討論するグループディスカッションを行ったり、ゼミナールの学生みんなで就職の面接試験の練習もしました。

「わたしは話すことが苦手だったのですが、ゼミでの発表や面接練習などを通して、人前で話すことになれることができました。話すことは社会に出てから必要不可欠なことだと思っています」と語るのは、秋山ゼミナールの堀川梓さんです。秋山先生は、「社会に出ると、意見を求めることも、求められることもあるでしょう。ゼミナールを通じて話す練習をし、他者とのコミュニケーションに今から慣れてほしいと思っています」と述べました。

ゼミナールのみんなで行った面接練習は「採用試験本番の面接よりも厳しかった」そうですが、その甲斐あって早々に希望する企業から内定を得ることができました。「毎回ゼミの時間の最初に、今週一週間の就職活動の取り組みについて、一人ひとり発表しています。わたしが内定をいただいたことを報告した時、ゼミのみんなや先生から『おめでとう』と拍手をもらったことがうれしかった」と話しました。地元秋田を元気にできるような働きがしたい、と卒業後の抱負を語る堀川さん。

秋山先生は、「就職活動を言い訳にせず、真面目にゼミに参加する学生たち」とゼミ生を評しました。「自分もふだん気をつけていることですが、目の前にある小さなことを一つひとつ確実にやりぬいていくことのできる人になってほしいと思います」と、本学に赴任して初めて送り出す卒業生へエールを送りました。

◆大学生活を振り返って

法律学科４年　堀　川　　梓

大学に入学して間もなく４年が経とうとしていますが、この４年間は本当にあっという間だったように感じます。大学生活においては、各講義やゼミナールにほとんど欠席することなく、毎回集中して受講しました。わたしが所属するゼミナールは、自分の関心のある分野を研究し、レジュメを作成して発表するという形式で行われました。

わたしは元々人前で話すことが苦手でしたが、社会に出てからはそのような機会はさらに増えると思い、このゼミナールでの発表は良い機会だと考えて臨みました。また、発表のほかにも、面接やグループディスカッションの練習といった就職活動対策や、卒業試験対策なども行われ、大変充実したゼミナールだったと実感しています。

今後は学生ではなく社会人として歩んでいきますが、この４年間で得た経験を生かし、地元である秋田の活性化に貢献できる人材になりたいと考えています。

◆卒業生に贈る

講師　秋　山　栄　一

これから社会という大海原に船出し行く皆さん、ご卒業おめでとうございます。

人は、数々の悩みに遭遇するものです。皆さんもこれから多くの問題に直面することがあるかと思います。それによって、物事に対し消極的になり、自分を見失う虞があるというのは非常に残念なことです。しかしながら、悩みというものは、そのようなネガティブな可能性を考えることしかできないわけではありません。悩むとは、自分がその問題解決について未だ諦めていない証であるともいえます。解決したいと心の何処かで感じ取っているからこそ、人は悩みを抱いていくともいえるのです。それ故、ポジティブな可能性を見出し、解決へ向けた行動を決意させたならば、それはもはや悩みではなく、解決への思索であるといってもよいのではないでしょうか。当然のことながら、先が見えず、五里霧中の向こうを目指して前進することは、不安という心がつきまといます。時には立ち止まったり、後退してしまう、さらには、遠回りをしなければならないこともあるかと思います。しかし、それを抱きつつも思索を錬り、初めの一歩を踏み出しゆくことは、その深い霧を抜け出すための確実な足跡を刻むことになります。その一歩一歩の積み重ねをした者こそが、目の前を覆い隠す深い霧を抜け出し、眼下に広がる景色を見渡すことができましょう。思索の具体化として、眼前にある事柄を一つずつ着実に解決してゆく。それが悩みを超え、大きな目的を達成するための大道であると考えます。

是非とも悩みを思索に変えうる心をもち、社会の荒波を越えゆく前向きな人間として、活躍していただきたいと思います。心からお祝い申し上げます。

特集卒業　法学部法律学科 ― 行政法ゼミナール「市民と行政」

「行政法は、憲法や民法ほど馴染みが無いため難しい分野ですが、勉強すればするほど理解でき、面白さを感じます」と語るのは渡部ゼミナールの幸坂綾子さんです。ゼミナールで一番思い出深かったことは、３年生の夏期休業中に函館へゼミナール旅行に行ったことで、函館の都市景観について市役所の方や街づくりの活動家などから直接話を聞くという体験ができました。

大学生活では、竿燈同好会に所属してお囃子の笛を担当し、初めて楽器を演奏しました。また、舞踏研究会を立ち上げ、部長も務めました。「宅地建物取引主任者」「秘書検定２級」などの資格試験にも合格。「大学に入学して様々な新しいことに挑戦してきました。初めて取り組むことも、努力の継続で身につくものがあると感じています。この４年間で、自分から意欲的に物事に取り組む姿勢ができました」と、学生生活を振り返りました。

ゼミの仲間からの推薦を受けて、３年間ゼミ長を務めた工藤健正さんは、大学祭の実行委員や、新入生研修会の学生スタッフにも取り組み、イギリスで剣道による国際交流も行いました。これらの経験から、「色々な個性のある人たちと上手く付き合って行くにはどうしたらよいか考えました。大学生活では人との接し方について学んだと思います」と語ってくれました。ゼミナールを指導する渡部先生も、工藤さんについて「みんなをまとめるのが上手いです。彼に任せれば、皆にきちんと連絡が行き渡り、意見を一つにまとめることができます」と話しました。

幸坂さんと工藤さんは第一希望に就職が決まっており、それぞれ「お客様から信頼され、地域に貢献できる」、「どんな辛いことがあってもプロフェッショナルに徹することができる」社会人を目標にしていることを話してくれました。

渡部先生は、ゼミナールの学生について「千差万別、個性的なゼミ生たちでした。皆明るく仲の良い学生たちで、私自身が励まされることもありました。これから社会の一員となったら、自分の成長だけでなく、人に貢献できるようになって欲しいと思います。困難にぶつかった時には、行政法という難しい問題で、解決法を学んだことを思い出してください。そうすれば必ず道は開けてくるはずです」と、卒業する教え子たちにエールを送りました。

◆行政法ゼミで得たこと

法律学科４年　幸　坂　綾　子

行政法は、あまり身近な法ではなく、多くの知識を要するため、初めの頃は判例一つを理解するのにも苦戦しました。しかし、分からないところを友達と教えあったり、自ら進んで何度も図書館に足を運んで調べたりすることによって、徐々に理解でき、楽しさを感じました。また、どのようにすればわかりやすく相手に伝わるのかを考え、レジュメ作成や発表を行うことでプレゼンテーション能力が、ゼミ生全員で討論し、互いの発言を咀嚼することでコミュニケーション能力が上がりました。

能動的な授業スタイルのおかげで、様々な能力を身に付け、就職活動においても役立ちました。この貴重な経験を、今後の社会人生活においても生かしていきたいと思います。

◆ゼミ長として

法律学科４年　工　藤　健　正

行政法ゼミナールでは、学生一人ひとりが判例を研究し、発表し合い、密度の濃い授業を展開することができました。先生と学生の仲も良く、授業中でもいつも笑いが絶えませんでした。行政法ゼミナールは、公務員試験対策にも最適で、将来公務員を目指している学生にも向いているゼミだと思います。授業はもちろんためになることばかりでしたが、ゼミ旅行としての函館旅行のように楽しい出来事ばかりで、ゼミの仲間とかけがえのない思い出をつくることができました。

◆社会に力を！

講師　渡　部　高　明

行政法は「市民と行政」を結びつける役割を担っています。しかし、行政法という法典がないこと、現代の行政は複雑で分かりにくいという特徴があります。そこで、ゼミナールではこの点を克服し、生きた行政の諸問題を考える力を養えるよう、３年生から主に判例研究を行ってきました。担当になったレポーターは実際の判例を調べながら、論点を整理し分かりやすく他のゼミ員に説明し、ディスカッションまで持っていきます。はじめは苦労しますが、次第に行政の諸問題を解決する能力がついてきます。

ゼミ員は個性溢れる多様な人材で、いつも和やかなムードでした。函館の景観行政を学ぶゼミ旅行も楽しかったですね。４年次の就職試験勉強、スピーチ練習、卒業論文レポート発表と、内容は結構ハードだったかもしれません。法科大学院への進学、消防署や金融関係など就職先は様々ですが、ゼミで学んだ力を社会で存分に発揮して頂きたいと思います。

特集卒業

看護福祉大 看護学科 ― 岩間ゼミナール「母性看護学」

◆笑顔を引き出せる看護師に

看護学科４年　佐々木　麻奈美

看護師を目指したきっかけは、母の影響とわたしの心の中にある人の役立つ仕事がしたいという思いからです。

大学での４年間、いろいろな状態の方と接する機会がありました。特に、学外の実習などでは、看護師からのアドバイス、患者の考えなどを知ることができました。そこで、物事をいくつもの方向から見つめ、自分がどのように行動したらよいのかということを考え、調整できるようになってきました。この点は、これからも磨いていきたいと思います。

卒業後は、看護師として患者や利用者、一人ひとりに平等に接すること。笑顔を引き出せるような看護師になりたいと思います。そのために必要ならば、認定看護師など、さらに上のレベルを目指してがんばります。看護学科の学生は、他の学科と比較しても勉強や実習に多くの時間が費やされます。その分だけ辛いこともあります。しかし、辛いことを乗り越えたことで、自分が成長する力となりました。後輩のみなさんもしっかりとがんばってください。

◆常に患者の支えとなる心掛けを持って

看護学科４年　近　藤　智　香

肉親が年齢を重ねる中で、病気に罹ることもあると思います。そんなとき、じっと見ているだけにはなりたくない。ほんの数分の応急処置の違いで助かることもある、と考えたことが看護師を目指すきっかけとなりました。

大学入学当初は、どちらかと言うと物事に対して受身で行動することが多かったと思います。勉強のスタイルが１つの正解しかないものから、複数正解のあるものに変化し、理解するのが大変な時期もありました。また、学内外の実習で戸惑い、悩むことも多くありました。

しかし、大学の先生、看護師や病院の利用者とふれあう中で、数多くの助言などをいただき、物事に対して積極的に取り込む方向へと気持ちが変化していきました。それは看護師を目指すきっかけを思い起こし、自分が主体的に行動しなければならないと考えたからです。

これから一人の社会人として、物事を前向きに捉えて働くこと。看護師としては利用者、患者の支えとして常に平等に、笑顔で接することを心掛けたいと思います。

◆自分が目指す看護師像の達成へ

准教授　岩　間　　薫

学生自身が学習する習慣を付けること。それに向けて個性を見極め、自分にあった勉強方法を見つけ出すように導くことから始めています。

これが習慣化することで、模擬試験の結果などから自分のポジションを把握し、必要なことを考えて積極的に取り組むようになるからです。

このほか、学生とは常に、コミュニケーションを図り、勉強面と合わせて、心やからだの面も十分なサポートを行えるようにしています。

卒業後、看護師として望むことは、「社会人として自分の行動に責任を取れる人になる」、「利用者に常に優しい気持ちを持って接する」、「自分が目指す看護師像を達成できるように、常に努力する」このことを、大切にして欲しいと考えています。

看護師は専門職です。職場に応じた知識を得るため、大学での学びを礎として学び続けてください。

看護福祉大 看護学科 ― 水木ゼミナール「成人看護学」

◆コミュニケーションを大切に

看護学科４年　池　田　　航

母と祖母の影響を受け、幼い頃から高齢者を支える仕事をしたいと考えていました。介護の分野で働くことを考えましたが、成長と共に、高齢者を支えるには看護の知識が必要だと思い、看護師を目標に定めました。

大学時代は、基礎となる知識をしっかりと学ぶことの他、相手の話をよく聞くこと。状況に合ったコミュニケーションを図ることを大切にしました。これは、幼い頃に母が働く施設へ一緒に行き、入所している方と話す中で自然に重要だと感じたからだと思います。

これから看護師として常に心掛けたいことは「仕事＝義務にならない」、「相手の話を聞いて、その人の立場に立って行動できるようになる」。この２点です。

最後に、後輩たちへ。自分にあった方法を見つけ出し、継続的に勉強をしてください。自分に合わない方法で続けることは反対に負担となります。試験では、リラックスした状態で臨み、最も自分の力を発揮できるようがんばってください。

◆地域をつなぐ看護師を目指して

看護学科４年　押　見　麻奈美

小学校の頃、肉親が間近で病気に罹り、重症化するのを見ていても何も出来なかった悔しい記憶が残っています。ここで知識さえあればとの思いがありました。その知識を生かす、看護師として働くことを目標に定めました。

大学時代に培ったことは、目標を達成する上でのチームワークの大切さや、助言を素直に聞くことです。自分で頑張ることも大切ですが、出来ることは限られています。学外実習の経験で周囲からの助言を受けることや、チームの一員として目標達成のために力を合わせることの大切さを実感しました。

卒業後、働くことになる病院は、地域医療の中核を担う病院です。その病院では、大学で学んだことを生かし、病院と利用者・地域の住民をつなぐ役割を果たしたいと思います。

国家試験対策は、早めに行うほど良いと思います。対策への準備・勉強は早すぎることは無いのです。そして、量より質を重視した勉強が大切です。

◆人間性豊かな看護師になるために

准教授　水　木　暢　子

ゼミでの指導は、学生一人ひとりの特性を引き出すよう心掛けています。

現在、４年生のゼミ生は６人。前期は勉強指導。後期には国家試験の対策を中心にしています。

看護師の国家試験対策は、模擬試験の結果を国家試験対策チームと共有し、学生の強み、弱みを把握し、必要な勉強が出来るように助言しています。勉強の支援が必要なときには、一緒に考えることもあります。

学生との面談は、週１回行っていますが、必要に応じて回数を増やすこともあります。そこで、勉強のほか、メンタル・健康面まで確認するよう努めています。

卒業後、看護師として望むことは、必要な専門の知識や技術をしっかりと勉強し、身に付けること。その上で、信頼されることを大切にして欲しいと思います。ひとりの社会人として自立すること。そして、人間性豊かで患者や利用者から愛される看護師になってください。そこから、信頼が生まれ、自分の力を発揮できる環境が作られていくはずです。

特集卒業

看護福祉大 福祉学科 ― 工藤ゼミナール「介護福祉学」

◆経験の中から学ぶこと　福祉学科４年　富　樫　絢　望

近親者に介護が必要な人が現れ、高齢者の介護をしたいと思うようになったことが福祉分野で働くことを考えたきっかけです。高校、大学での福祉施設のボランティア活動などは、更なる動機付けとなっていきました。大学での実習と講座は、「高齢者介護」という福祉の一部だけでなく、幅広い福祉を経験することができました。

これらの経験が、私にとって進路選択、将来像を具体化するための貴重なものになりました。

自分が働く上で理想とする「利用者からも職員からも頼りにされる人」の実現ために今後も努力を続けます。

自分の進路を決める上で、後悔をしないようにいろいろな分野の福祉を見て、感じてください。そのための知識や、技術の基礎となることは大学の学びを通して身につけておく必要があります。いろいろな経験を持つ先生たちに相談し、自分が何をしたいのかを考え、それを実現してください。

◆福祉を考える心　福祉学科４年　兎　澤　小夕美

元気だった祖母の介護体験がきっかけとなり、福祉学科へ進学しました。介護する父や母の大変な姿を見る中で、私は高齢者を支援する技術を身につけた人になりたいと考えるようになっていったのです。その後、福祉施設でのボランティアを経験し、自分が関わる仕事で、利用する人たちを笑顔にできる人なりたいと考えるようになりました。

利用者のことを考え、信頼されて気軽に相談を受けられるような人。管理職になっても笑顔で人と向かい合う職員を目標にがんばります。そのためには、技術や知識だけなく、大学で勉強する中で気づいた「人の日常生活に根ざした仕事」としての福祉を実現するという考えを持ち続けていきます。

◆新たな挑戦をすること、行動の根拠を持つこと

准教授　工　藤　　久

自分の行動は、科学的なデータなどを根拠にしっかりと説明することができる。また、新しいことにも積極的に挑戦できるように指導をしています。介護や援助の分野には、これからも新たな手法などを開拓する余地が十分にあるからです。この４年間は、そのための基礎となる知識や技術をいろいろな形で得てきたと思います。

４年制大学を卒業した皆さんは、将来、管理職としての能力が求められます。依頼された仕事は断ることなく積極的に行ってください。それが皆さんへの期待の現われなのです。これからも継続的に学習を行い、自分が思い描く将来像を福祉の分野で実現してください。

看護福祉大 福祉学科 ― 成田ゼミナール「精神健康保健」

◆精神的な成長を社会でも

福祉学科４年　仙　道　　光

大学では、福祉分野の基礎となる知識や技術の習得に励みました。それ以上に自分に否定的だった私が、ここでの勉強や生活を通して自信を持つことができるようになり、精神的に強くなったことが成長だと思います。卒業後も自分の現状に満足せず、向上心を持って努力することを心掛けます。

最後に、福祉を目指す学生たちは、あいさつを欠かさないこと。人には感謝をもって接することを忘れないで欲しいと思います。基本的なことですが、最も重要なことです。

そして、目標に定めたことに対して最後まで諦めないこと。継続して続けることこそ結果につながると思います。

◆利用者一人ひとりを見つめる職員として

福祉学科４年　奈　良　希　望

社会福祉士の資格を取得したとしてもその知識のすべてが自分のものになったとは思いません。これから福祉の仕事をしていく上で、単に資格取得のため丸暗記したような知識ではなく、もっと実践的に現場で活用できる知識・技術を得るため、今後も勉強を続ける必要があるからです。

私が仕事をする上で心掛けたいことは、日々の流れの中で、機械的な作業するだけではなく、利用者一人ひとりに対応したケアを行うことです。利用者の個性に応じたケアの実践を常に念頭に置き、信頼関係を築いていきたいと思います。

私が就職活動をする上で学んだことは、自分が目指す分野を早めに定め、積極的に活動することが大事であるということです。情報をただ待っているだけでは良い結果は得られません。必要な情報を収集し、試験に向けた準備、先生への協力依頼など、やるべきことはたくさんありました。私はどうしてもその法人に就職したいという気持ちがあり、それが後押しとなって、積極的に動けたと思っています。就職活動を通して、たくさんのことを学び、ひとまわり成長できたと思います。

◆相手を思い、世の中に貢献できる人に

教授　成　田　　猛

ゼミでは、自分の考えたことを言葉にする。文字で表現する。そのために知識を獲得することを主眼に計画をたて実行してきました。少子化の時代をむかえ、相互にコミュニケーションを取る機会がすくなくなりました。自分の考えを論理的に話し、相手に伝えることは、これからの社会で必要不可欠であると思います。

これは、論理や知識で相手を威圧するためのものではありません。社会では人間関係に重きが置かれます。ゼミで獲得した力を糧に、卒業し働く中で、出会う職場の上司、同僚や利用者の考えを感受しながら、豊かな人間関係を築き、これまで学習した様々な知識、技術を社会に還元し貢献されんことを心から期待しております。

これからは、大学での４年間以上に厳しい出来事がまちうけているでしょう。どのような困難に遭遇しようとも、福祉の心を忘れずに、利用者に対し礼を失することなく職務に励まんことを祈念しております。

栄養短大 ― 東ロゼミナール「けいらんの嗜好性を把握する」

東ロゼミナールでは、北東北の郷土料理である「けいらんを作る」をテーマに活動してきました。

けいらんは、北東北の中でも特定の地域の郷土食のため、ゼミ生で食べたことのある学生はいませんでした。地域によって味付けも違うため、地域ごとの味付けによるけいらんを調理し、比較研究しました。ゼミ生の伊藤沙弥佳さんと照井志織さんは、調理実習などで作った料理を家でもよく作ってみるそうです。伊藤さんは「けいらん」を、照井さんは「鯖の味噌煮」などを家族に振舞ったそうです。

東ロゼミナールではこの他にも、能代商業の生徒たちが育てた地元産の食材を使って、新しいレシピ作りにも挑戦しました。特に、北限のお茶を使った料理のレシピを考えたことは、お茶の葉を使って料理を作ることが少ないため、印象深いものになったそうです。

卒業後の目標は、二人とも「管理栄養士国家試験合格」を挙げてくれました。東ロ先生は、「卒業後も、学生たちのことはやはり気になります。しかし、社会に出ると、こちらの心配をよそに、皆しっかりしてくるものです」とのこと。卒業後は病院で栄養士として働くことが決まっている二人ですが、「優秀な学生でしたので、卒業試験などと同じように、いままで通り勉強を続けていけば必ず管理栄養士国家試験に合格できるはずです」と語ってくれました。

◆栄養の専門家へ

栄養学科２年　伊　藤　沙弥佳

短大での２年間を振り返ると、とても短く、そしてとても充実していたという印象があります。わたしは幼い頃から料理をすることが好きだったため、それが大きな理由となり、秋田栄養短期大学に進学することを決めました。入学した当時は栄養に関する知識は皆無に等しい状態でしたが、２年経った今、栄養の専門家になるための知識を蓄え、これから実践に移すためのスタートラインに立つことができました。たったの２年間ではありましたが、わたしのこれからの人生を大きく変える二年間になったことは間違いありません。

短大での授業を通して、技術面だけではなく、精神面も共に鍛えられたということを私自身とても感じています。社会に出るとどんな困難が待っているのかは分かりませんが、短大で学んだことを生かして、将来は立派な栄養士になれるように日々努力をしていきたいです。

◆短大での学習を振り返って

栄養学科２年　照　井　志　織

短大で過ごした２年間を振り返ると、本当にあっという間だったように思います。入学したての頃は、学校生活や授業に慣れることに必死でしたが、だんだん慣れてくると余裕もできてきて楽しく感じるようになりました。

１年生の前期は、ほとんどが座学の授業で辛く感じることも多かったのですが、後期からは前期で学んだことを生かした実験や実習が増え、より理解が深まりました。また、給食を実際に作る実習も始まり、実践的なことについて学ぶことができました。

２年生になって、わたしは東ロゼミナールに所属し、「けいらん」という伝統料理について調べ、実際に作って試食もしました。「けいらん」は秋田・青森・岩手に伝わる料理で、同じ料理であるのですが、味付けや材料が違い、その地域の特色があることを知ることができました。他にも、東ロゼミナールでは色々な料理を作ってとても楽しかったです。

短大に入り、県外や県内の様々な地域の友達もたくさんでき、人間関係や物の考え方など多くのことを学ぶことができました。また、これから同業者となる仲間もできたので、卒業してからもこの出会いを大切にしていこうと思います。

この２年間で学んだ多くのことを社会に出てからも生かしていけるように頑張りたいです。

◆「伝統料理「けいらん」の嗜好特性について」

講師　東　ロ　みづか

「けいらん」は秋田県鹿角市、青森県むつ市、岩手県遠野市付近に古くから伝わる伝統料理です。この３地域で食べられている「けいらん」の嗜好特性を、種々の官能検査の手法を用いて明らかにすることを目的として、この１年東ロゼミナールは活動してきました。

ゼミナールの初期には味覚訓練にチャレンジしました。些細な味の違いに敏感な人、鈍感な人がいるといった個人の味の感じ方の違いが実感できたと思います。また、味覚訓練を繰り返すうちに、自身の味覚が研ぎ澄まされていくことを体感できたことでしょう。その後、「けいらん」の調理実習と官能検査を繰り返し行いました。そこではちょっとした副材料の違いにより、「けいらん」の嗜好特性が大きく異なることが理解できたと思います。

「けいらん」という伝統料理一つとってもそうですが、普段何気なく食べている料理の嗜好特性を理論化することは非常に難しいものです。１年間東ロゼミナールで学んだことにより、この料理がなぜおいしいのか、なぜおいしくないのか、科学的根拠に基づいて考え説明しようとする習慣が身に付いたのであれば、東ロゼミナールは成功です。東ロゼミナールで学んだからには、いつまでもその習慣を持ち続けてほしいと思います。

失敗は成功の因

明桜高等学校長　古　谷　元　人

人生には失敗や挫折はよくあることです。未来は刻々とやってきて誰もが初めての時間を過ごしていくのですから、あって当たり前です。変化が激しく予測が難しい社会になればなるほど対応は難しくなりますが、失敗には成功へのヒントや新たな目標への入り口が用意されていることがあります。失敗の原因を考えて反省し、方法や欠点を改めることによってその後の成功へとつながることになります。失敗を恐れて殻に閉じこもったり、こじんまりとまとまることを優先してはいけません。これからも多くの人と出会い、多くの経験を積むことで、人間としての底辺を広げ、自らの人間性と人生の目標を高めていってください。

「失敗は成功の因」とか「七転び八起き」といった積極的で粘り強い人生を示唆することわざがあります。また、詩の一節に「冬来たりなば春遠からじ」と、希望をもたせて勇気づけてくれる言葉もあります。明桜高校の船出のときを共に歩んできた卒業生の皆さんには特に、直面する困難から逃げることなく、勇気をもって自己実現を図っていって欲しいと願っています。人生におけるこの三年間はかけがえのない三年間であり、未来への架け橋となる三年間になし得たことと信じています。

大学受験を終えて

長　澤　愛　美

大学合格を目指し、大学の講義の受講や英語小論文、面接の練習などをしてきました。難しいものばかりでしたが、その中で「自ら考える」ということを学びました。

試験に向け計画を立て、自ら動かなければなりません。困難にぶつかった時には、周囲の人々に支えられながらも、最後には自分の力で乗り越えなければなりません。

また、大学の講義を受け、環境問題や南北問題など難解な問題でも、深く知り自分なりの解決策を考えることが大切なのだと感じました。それから、社会的・国際的問題に対する関心が高まり、地域の勉強会にも参加するようになりました。大学受験が社会人になるための第一歩なのだと実感しました。

こうしてわたしが多くのことを学べたのは、先生方や家族、友人の支えがあったからだと思います。本当に感謝しています。感謝の気持ちを忘れず大学でも勉学に励み、将来は秋田と世界をつなぐ仕事をしたいと思っています。

3年間で学んだこと

新　山　純　平

明桜高校に校名が変わった平成十八年春。初めての入学生として入学してから早くも三年が経とうとしています。私はたくさんの方々に支えて頂いた三年間で、様々な事を学ぶことができました。

その中で野球部で教えて頂いたり経験させて頂いたりした事は、これからの自分にとって、とても大切な事でした。昨年の夏には、多くの方々から応援して頂き、甲子園に出場することができました。これは思い出だけでなく、何よりも大きな経験になったと感じます。野球部で学んだ事の中で、何よりも大切な事は挨拶と礼儀です。今では習慣となっている事ですが、これは社会人としてできて当たり前の事だと私は思います。春から社会人となる私が高校三年間でこれを習慣にできた事はとても大きな事だと思います。

これまで培ってきた事を生かし、これからもより成長できるよう精一杯頑張っていきます。三年間、色々な面で御指導頂き、ありがとうございました。

のびのび幼稚園

「卒園おめでとう」

副園長　湊　　良　子

年長組のみなさん卒園おめでとう！
のびのび幼稚園でも楽しい事がたくさんあったように、小学校に入っても楽しい事がたくさんあります。でもね、苦手な事、できない事もあるかもしれません。それは、皆それぞれ違っていて、勉強かもしれないし、運動かもしれません。でもね、苦手な事、できない事があっても、全然悪い事じゃないし、かっこ悪いことじゃないんだよ。苦手な事があってもいいし、できないことがあってもいい。
そのかわり、できないからって諦めないで、できるようになる努力をしよう。

あきらめずに頑張る事はとっても大切な事だし、そういう頑張ってる姿こそ、かっこいいんだよ。みんなは、運動会でも、オペレッタでも、一生懸命頑張る事が出来ました。
友だちと何度も相談したり、時にはけんかをしたりしながら、心をひとつにして頑張りましたね。だから、小学生になってできない事があっても、諦めないで頑張ることができるはずです。そして、頑張っているカッコイイお友達を見つけたら、応援してあげたり、一緒に頑張ってあげたりできる、優しい一年生になろう！みんななら、そんなかっこいい一年生にきっとなれます。

きれいに皮がむけたよ

みんな仲良くグッスリです

本物をはじめて見たよ！

大きな花束できるかな？

みんなおいしそう。どれを食べようかな

上手に竿燈をあげました

さくら幼稚園

「卒園によせて」

副園長　加賀谷　雅　子

さくら幼稚園では、朝に全職員で登園してきた子どもたちを迎えています。「おはようございます」「先生、昨日お家でね…」などと子どもたちの心身の健康を伺っています。一人ひとりの表情が豊かで楽しそうであれば保育者として幸せな気持ちを、何かありそうであれば心を傾け楽しくなるよう保育者としての工夫をし、保育者として、人間として、毎日子どもたちからいっぱいのプレゼントをもらっているようです。

サンタさん、プレゼントありがとう

おいしいおもちになあれ、ぺったんこ

こんなに上手に刈れたよ

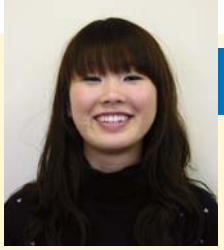
見て見て！大きいおいもでしょ

こうやってぎゅっとにぎるんだね

お家のんがお店屋さん!!

ダンスも歌も上手でしょ

さくら幼稚園は各年齢一クラスずつの園ではありますが、その分関わりが深く、大きい子は小さい子の面倒をよく見てあげ、小さい子も自分が大きくなったら親切にしてあげたいという心が自然と育っているように思います。昨今、人間関係の希薄さが問題になっていますが、本園の子どもたちの優しい心の育ちをとてもうれしく思っています。
かつてうれしさと、ちょっぴりの不安を抱きながら入園してきた年長児たちも園を巣立ち、小学校入学の日を迎えようとしています。朝の会話もランドセルや机が届いたといったものが多くなってきました。さくら幼稚園で経験した全てのことが、一人ひとりの心の糧となり、これからも健やかに成長していってほしいと願っています。ご卒園おめでとうございます。



韓国に留学するにあたって

法学部
観光学科１年　石郷岡　サヤカ

いよいよ留学する日が近づいてきました。入学当初から、韓国に１年間留学することを希望していたこの日が来たんだと実感しています。

わたしが韓国語に興味を持ったきっかけは、高校生の時に交換留学生で来た韓国人の友達と出会ってからでした。韓国人の友達と触れ合って行くうちに「わたしも韓国語を学びたい。韓国の友達と韓国語を使って話したい」と思い、韓国に１ヶ月間留学しました。初めての海外で、ろくに韓国語も喋れず１ヶ月間ずっと英語やジェスチャーを使って友達と話していました。１ヶ月間の留学を終えてから、留学していたときずっと英語やジェスチャーを使っていたことにもどかしさを感じていたので、このときから本格的に韓国語の勉強を始めました。韓国語を習い始めてから約３年が過ぎようとしています。あっという間の３年間でしたが、とても内容の濃い３年間だったと思っています。３年の間に姉妹校に２度短期留学し、韓国人の友達もたくさんでき、わたし自身も最初に比べ、韓国語を喋れるようになったと思います。

今が、わたしの韓国語能力を試すチャンスだと思っています。このチャンスを無駄にしないで韓国では充実した生活を送りたいと思っています。語学堂での勉強は大変だと思いますが、語学堂の人たちと切磋琢磨して頑張りたいと思っています。友達もたくさん作り、夏休みなどは一緒に旅行に行きたいと思っています。観光学科の人たちと離れるのはとても悲しいけれど、「韓国語の通訳になる」と言う夢を叶えるには避けては通れない道だと思っているので一生懸命頑張ってきたいと思います。

留学の思い出に感謝を込めて

孫（ソン）　響雅（ヒャンア）（慶熙大学校交換留学生）

ノースアジア大学での生活は本当にあっという間でした。秋田への留学が確定した時、自分の未熟な日本語で、一人でどのように１年を過ごすか心配ばかりでした。しかし、次第に日本での生活にも慣れ、友達も出来て色々なことを経験し、今では秋田ほど良いところはないと感じるようになりました。

この１年間にあった色々なことは全て忘れられない思い出になりましたが、わたしが一番印象に残っているのは、大学祭で韓国の料理を売ったことです。日韓交流会というサークルを作って、友達と一緒にお店の準備や広報をし、終わってからは打ち上げもしてとても楽しかったです。特に、日本人は韓服を、韓国人は浴衣を着て料理を売ったことが良かったと思います。ノースアジア大学の大学祭は、韓国の大学の学院祭とは違う文化を感じることができた機会でした。

思い起こすと、秋田での生活は、韓国に帰ってからも絶対に忘れることのできないものでした。ここで出会った人々との縁がずっと続くようにと願っています。ノースアジア大学で過ごした一年間の全てが良い思い出になったことに心から感謝しています。本当にありがとうございました。

また会えるといいな、アキタ

朴（パク）　チャアミ（慶熙大学校交換留学生）

冬になったら雪の多い所、これが私が秋田について知っていたほぼ全てであった。

どんな所だろう、私が１年間生活するところは。昨年の４月初め、私は秋田に到着した。

秋田空港から秋田市内へ移動する途中に見えた、童話の中に出てきそうな小さくてかわいい住宅が私の心をとらえた。空が広く見えるちょっとだけ繁華した小さい都市、これが初めて秋田に着いた時の印象であった。

新学期が始まって私は期待に弾む気持ちで学校へ通い始めた。しかし、友達を作ることは思ったより大変だった。多分日本人も韓国人も自ら近づくよりは相手の方から近づいてほしいという照れ屋な性格を持っているからだと思う。私は特にそうであった。しかし、ずっと悩んだ後、私はとうとうあるサークルのドアを叩いた。自らまず誰かに声をかける勇気がないと、縁は始まらないということを知っていたから。

外国人だから負担になったらどうしよう。気まずい雰囲気になったらどうしよう。という私の考えは杞憂に過ぎなかった。サークルの皆は私のことを「外国人」ではない「普通の部員」として接してくれた。特別扱いをするとか、疎外しなかった。私はそれが本当に嬉しかった。留学の経験がある人なら同感してくれるだろう。外国人だと考えて接すると決して互いの距離は縮まらない。

この10ヶ月間、私は何とも換えることのできない貴重な経験をして、かけがえのない大切な友達ができた。外国人として、ある国で生きて行くのが決して容易くないことも知った。いくらお互い影響された隣の国だとしても文化の違いは沢山あることもわかった。本当に教科書や本では学べないことをたくさん学んだ。これから私はまた色々な経験をして様々なことにぶつかるだろう。その時、ここで得た経験と教訓を忘れずに生かして行くと思う。また会えるといいな、アキタ。

高校吹奏楽部が金賞・大学吹奏楽部が銀賞を受賞

―アンサンブルコンテスト秋田県大会―

このほど、秋田県民会館を会場に全日本アンサンブルコンテスト秋田県大会が開催されました。

本学園からは、大学の部には、ノースアジア大学吹奏楽団混合４重奏（クラリネット、フルート、アルトサックス、ユーフォニアム）、高校の部には明桜高校吹奏楽部の金管８重奏（トランペット、トロンボーン、ホルン、ユーフォニアム、チューバ）が出場しました。

大学は、平成５年以来の出場で銀賞を受賞。高校は、昨年に続き、金賞を受賞。今年は、県代表として東北大会への推薦を受けました。

２月14日に行われた東北大会で明桜高校は、金賞を受賞しました。

観光シンポジウム

秋田の国際観光振興策を語る

１月22日、ノースアジア大学40周年記念館講堂で、秋田県の国際観光をテーマに観光学科主催のシンポジウムが開催されました。

はじめに、観光庁国際観光政策課長補佐の村上雅巳氏、秋田県産業経済労働部観光課国際観光班副主幹の益子和秀氏が、それぞれ国や県の立場から国際観光推進の現状と今後について基調講演を行いました。

村上氏は、観光交流により日本によいイメージを持ってもらい、外交を補完することや、観光による地方の交流人口の拡大についてなど、国家戦略としての観光について述べました。

益子氏は、台湾・香港・韓国などを例に挙げて、秋田の観光の現状について説明。地域の特性によって有効な集客プロモーションの方法を実施することや、国際情勢を見極めて複数の国をマーケットとして持つ重要性について述べました。

その後、村上氏、益子氏、大韓航空秋田支店長の徳山英広氏にご参加いただき、本学教員、観光学科学生を交えて、パネルディスカッションを行いました。

観光学科２年生の根田理香さんが、学生が自ら計画し、３月に実施される韓国研修旅行についての説明を行い、徳山氏からツアーの内容についてアドバイスを受ける場面も見られました。

また、観光学科２年生の阿蘇圭介さんが、自らの体験から感じた秋田のホスピタリティの現状について発表しました。

「仲間の支えがあればこそ、受賞できた」

加賀竜太さん（明桜高校）が、日本学生野球協会の平成21年度 表彰選手に選出されました。

本学園でこの表彰を受けるのは、平成５年度以来、加賀さんで６人目となります。

表彰式は、高校視聴覚室で行われ、北林秋田高校野球連盟会長から加賀竜太さんに記念の表彰盾が送られました。

加賀さんは、今年度の硬式野球部主将、捕手としてチームの要の役割を果たし、明桜高校を13年ぶりの甲子園に導く活躍をしました。

表彰式後、加賀さんは「仲間の支えがあって、受賞できたと思います。今後は、この賞を励みとして充実した生活を送りたい」と受賞の感想を話しました。

インフォメーション

ノースアジア大学・秋田栄養短期大学・秋田看護福祉大学校友会

校友会（卒業生）の皆様へ

校友会の活動については次の通りです。

◆主要行事

◎会員情報の整理・保管　◎会報の発行

◎母校（教育諸活動）の支援　◎会員の慶弔

◎総会・部会・支部会の開催

◆校友会活動についてのお問い合わせは

校友会事務局（ノースアジア大学桜友会館内）

〒010-0058　秋田市下北手桜字守沢21－９

Tel：018－836－6534（FAX 兼）

＜月・水・金　10：00～16：00＞

平成22年２月26日　編集・発行　理事長総室　〒010-8515 秋田市下北手桜字守沢46-1　Tel. 018-836-6527 Fax. 018-836-3321 URL. http://www.nau.ac.jp/houjin